

漢方は「証」に従って治療します。「証」とは、体質的なものと、症状的なものとを合わせて、体全体の体況を示すものです。

かぜ症状の初期に対する処方では例え、虚弱体質の患者さんで、熱があれば桂枝湯、悪寒、微熱、四肢冷感のある患者さんには麻黄附子細辛湯などが処方されます。反対に比較的体力のある患者さんで、熱があれば葛根湯、鼻水、くしゃみなどの症状には小青竜湯など処方されます。そのときの体力、症状によって適した処方が異なります。

西洋医学では、発熱していたら解熱鎮痛薬、せきがあれば鎮咳薬と使い分けますが、漢方医学は患者さんの体質や現在の症状を考慮して処方を使い分けるので、「同じか

ちよつと得する
クネリの知識
94

漢方治療は個人差重視

ぜ症状なのに違う薬をもらった」なんてことも起こり得ます。

このように、患者さんの「証」によって、同じ病気でも異なった処方が使用される事を「同病異治」と言います。一方で、全く異なる病気に対して、同じ処方薬が用いられることがあります。これを「異病同治」と言います。例えば、葛根湯はかぜ薬として有名ですが、ほかにも肩こり、中耳炎、へんとう炎、じんましんなどに用いられることがあります。かぜでもないのに、葛根湯を処方されて困惑された方もいるかもし

れませんが、処方間違いではありません。

漢方医学は西洋医学とは違って「この病名にはこの薬」というような決まった関係はなく、患者さん一人一人の個人差を重視して治療を行う医学です。「貧血でもらった漢方を飲んでいたら同時に冷え症もよくなった」とか、「頻尿でもらった薬で腰痛や膝の痛みが改善し、なぜかかすみ目もよくなってきた」などのありがたい効用が出ることもあるのが漢方医学の特徴です。

(牧野和也・県病院薬剤師会理事)

<毎月第4火曜日に掲載>